



お伽訓話

三つの難問

硯山人

むかし〜或る所に一人の王様がゐらつしやいました。たぐさんの臣下のうち一人太助と云ふ大層正直な下僕がをりました。この王様は太助が一番に御好きで毎日王様の食事の事から何から何にいたるまで皆太助が致してをりました。ところが王様は食事を召し上つたのち何やら御一人できつとまためし上ります。それは太助にも何を上るか御教へにならずきつと食事後に一人でめし上つてをります。

或る夏の日の事で御座りました太助がふと王様の御部屋に参りますと王様は今丁度御飯をめし上つた所でして何か一人でしきりと召し上つてをりました。太

助は之は悪いところにはいつてきたとは思ひましたが又いつも王様が食後きつと一人でめし上る物は何かしらと急に知りたくなりましたのですから

「王様の召上つてゐらつしやる物は一體何で御座いますか」

と丁寧に御尋ね致しました。王様はニツコと御笑になりました

「之かこれは白い蛇の尾だ」

とおつしやいまして皿から一片をとり出し

「太助。御前も長々奉公してよく忠義をつくしてくれたから今日は

褒美に之を一片上げやう」

とおつしやりながら太助に下さいました。太助は大層喜びまして早速一片頂戴致し王様の召し上る物ですから定めし美味なものでせうと思ひながら食べて見ますると味も何もありませんでした。けれども王様はニコく笑らいながら

「太助。御前がそれをたべると今にびつくりする事が出来るぞ

と申されました。その日の夕方太助は一人で御殿の庭に出てあちこちと散歩を

致してをりましたところ不思議や急に鳥の御話やら虫の御話をしてゐるのが皆わかるやうになりました。之れは面白いと思ひあちこちとなほ散歩致しとうとう大きなく御池のそばに参りました。ふとむかうの方を見ますと澤山な鶯鳥がガア／＼ガア／＼と大騒ぎを致してをります。太助は何事が起りましたのかとそばへ行つて見まると

鶯鳥の甲「ア、苦しいア、苦しいまるで御腹が裂けて仕舞そうだ」

鶯鳥の乙「マア、一體どうなさつたのです、どうしてそんなに御苦しいのです」

鶯鳥の甲「イエ先程御庭の隅みで金の指環が落ちてをりましたのをつい

呑込んで仕舞つたのです」

鶯鳥の乙「それは大變な事をなされましたねどう致したものでせうか」

と云ひながらガア／＼と大騒ぎを致してをります。太助は之を見ますと早速飛んでいつてその指環を呑みこんだと言ふ鶯鳥をつかまへました。そして御城に

歸つてきて見ますと御城では大騒ぎです。皇后様の大切な指環がなくなつたと云ふ事で皆んなで方々を探してをりましたところ御座いました。そこで太助は

「その指環なら此の鷺鳥が呑みこんだのです」

と申しましたが誰れもほんとうにするものがありません

「そんな筈はない。鷺鳥のお腹の中の物がどうして分るものです

か」

とてんでとり合ひません。太助はそこで鷺鳥を殺して見ますと果してその御腹から金の指環が出て参りました。皆んなは大變にびっくり致しました。太助は澤山の御褒美を頂きました。或る日太助は王様の前へ参りまして

「さて。ながらく御厄介になりましたが私も少々世界中を廻つて歩

きたいと思ひますからどうか御暇を下さいませ」

と申しました。王様は

「それは誠によい思ひつきだ。それでは早速之から出發したらばよからう」

とて又澤山の御金やいろいろの立派なものを給はりました。太助は「私は別に何にも入りませんからどうか一匹のよい馬を下さいませ」

とて一匹の大層よい馬と少し許りのお金とを頂いて此の御城をあとにして、トウトウと出發致しました。

やがて大分参りますと一つの大きな河のそばに参りました。太助は此の邊で一休み致しませうと思ひまして河の岸へ腰を下しました。すると足元で誰やら呼ぶものがあります。はてなと思ひまして下を見ますと小さな御さかなが

「モシく。どうか御願ひですから私をこゝから出して下さいませ」

と申してなります。よく見ますると藻の間からまれてその小さな御魚は大層

困つてをる所でした。太助は親切な人ですから

「ヤレく可愛想に定めし困つた事であろう今私が藻をとつて

上げますよ」

と云ひながら藻をどけて小さなおさかなを逃してやりました。小さなおさかなは喜んで鰭を振りながら

「どうもどうも難有う御座りました。きつと御禮は致します」

と云つたかと思ひましたら水底深く沈んで行つて仕舞ました。太助はまたドンくと参りますとむかうの方で赤い蟻がたくさん集まつて何やら騒いでをります何を云つてゐるのかと思ひ傍へ参り聞いて見ますと

蟻の甲「モシく又人間がやつてきましたよ 折角私たちが巢をこし

らへるとは人がきて踏付けてゆくから困つて仕舞ます」

蟻の乙「ほんとにそうです、どうかこんどきた人は私たちの巢をよけて

歩いて行つてくれるとよいのですが

など、申してをります。そこで太助は蟻の巢をよけてぐるりと廻つてゆきました。すると蟻共は大層喜びまして

「どうもく難有う御座います きつと御恩返しは致します」と叫びました。

やがて日の暮れがたに太助は大きな林をとつてゆきました。そうしまするとしきりとピヨくする聲がきこえます。だんくその聲の方へ行つて見ますると一羽の雛鳥が地面におちて困つてをる所でした。太助はすぐひろい上げて「お、可愛想に。然し私が見付けてからは大事にして上げるからもう心配する事はない」

と親切にいたはつてやりました。そして翌日になりその小鳥を逃してやりまると小鳥は喜び勇んでパタくと羽ばたきをしながら

「御蔭様で助かりました。又その中御目にかゝる折もきつとあり

ませう」

と云ひながら飛んでいつて仕舞ました。

やがて太助は或る立派な町へ参りました。その町の入口に大きな立札が立つてをります。

「三つの難問をとき得ると思ふ者は來れ」とたゞ書いてあります

三つの難問とは何でせうと太助は考へました然し兎に角御城に行つて見ませうと思ひまして御城をさして参りました。やがてその町の王様に御目にかゝると「こゝから十里東の方へゆくと河があるそこに金の指環が沈んで

ゐるから持つてこい

との事でした。太助は云はれました通り東の方へ十里行つて見ますとそれはそれは大きな河がありました水はドン／＼と流れてゐてどこに指環が沈んでゐるかとても分りません全くとほうにくれてぼんやり立つてゐますと

「モシ／＼ 指環は茲にありますよ」

と云ふ聲がします驚いて見ますと先日のおさかなが口に指環をくわへて來まし

た。太助は大層喜び厚く御禮を云つてその指環を持つて王様の所に参りました。王様は大層御ほめになりました

「それでは此の御米を一粒づゝひろつて筑の中なかに一時間いちじかんの中に皆みないれなくてはいけない」

と申まうされました。見みますると澤山たくさんな御米おこめが山やまのやうに積つんであります太助たすけは一粒つぶづゝとつては筑ぎくの中なかに入いれましたが一粒つぶづゝでは中々なかにはかがゆきませんとでも一時間いちじかんはおろか一日いちにちかゝりましたも一粒つぶづゝでははこびきりそうもありませんでしたところがどこから來きたともし澤山たくさんな赤蟻あかありがでてきました

「サアく皆みななて手傳てつだいませう」
と申まをしながらまたく間にその澤山たくさんな御米おこめを皆みな筑ぎくの中なかに入いれて仕舞しましましたところへ王様わうさまがでて御おいでになつて

「これはゑらいそれでは第三だいの難問なんもんを出だそう それはこの世界せかいの果はてに大おほきな林檎りんごの木きがあるその實みを一つ持もつてきてほしい」

と云ふ事ことでした。之これには太助たすけもほと／＼困こまつて仕舞しまました。どうして海うみや山やまを越こへて世界せかいの果はまで行ゆかれやうかとボンヤリ空そらをながめてをりますと忽たちまち一羽いつはの鳥とりが嘴くちばしに一つの林檎りんごを喰くへて舞下まひさつてきました。そして

鳥とり 先日せんじつは御蔭おかげ様さまで命いのちびろいを致いたしました今日は其その御禮おんれいの印しるしに

世界せかいの果はての林檎りんごの實みを一つ採とつて参まりました

と云いつて太助たすけにその林檎りんごの實みを渡わたしました。太助たすけは大層たいそう喜んで王様わうさまのところへ

此この實みを持もつて参まりますと王様わうさまは又大層またたいそう御喜およろこびになりまして

「御前おまへはほんといゑらひ人ひとだ 今日けふから御前おまへを此この國くにの王様わうさまにし

て上げる」

とて太助たすけを王様わうさまにして下くださいました。太助たすけは立派りっぱな國くにの王様わうさまになりました安樂あんらく

に此この世よを送おくりました

めでたし／＼／＼